

山上憶良私見

—その文学志向性について—

岡 田 喜 久 男

山上憶良は、万葉集の数多い歌人の中であつて、専ら人生を直視し思想的な歌を残した、学識豊かな人生派歌人であると言われている。作品に、老・病・貧苦・父性愛を高らかに歌い、長い漢文や、漢詩を残している所から、奈良朝の歌壇から、いやいわゆる和歌文学史上からも孤立しているとみられる特異な歌人である。然し、いづれの作品にも極めて個性豊かな人間味が感じられて、親しみが感じられる事でも集中第一の歌人であろう。

憶良は万葉の歌人としては、その生没年代や閨歴が比較的正確に把握できる方である。「続日本紀」文武天皇・大宝元年春正月の条に

丁酉、以_二守民部尚書直大貳粟田朝臣真人一_為遣唐執節使、
左大辨直廣參高橋朝臣笠間_為大使……進大肆白猪史阿麻留、
无位山於憶良_為少録。

とあるのをはじめとして、「続日本紀」、万葉集の両書によつて、大体憶良の生きていた時代、閨歴、作歌年代等が浮かび上つてくる。又その全作品（ひとり長短の和歌のみならず漢詩文を含めての）を注意深く読み味わうことで、彼の思想、学識、生活態度、家

山上憶良私見 —その文学志向性について—

庭状態などかなり具体的に伺い知ることが出来る。それだけに、山上憶良は實在感に富んだ人間味豊かな歌人として私達に迫つてくるのである。よく言われるように、奈良朝の歌壇は、和歌が抒情の世界を歌うことに重点を置いた時代であつたが、一方では長歌に新しい世界を求めようとする試みも幾人かの歌人によつて行われた。特に、長歌に「伝説」を語らせた高橋虫麻呂と「人生」を歌わせたと言われる憶良の二人は、長歌にこそその本領を發揮した歌人と言えよう。大きく考えると、万葉の長歌の歌い方には、人麻呂流の、伝統をふまえた形式美の中に、人を圧倒する情熱を盛り込む行き方と、虫麻呂・憶良流の、話の筋や思想の展開を散文的に長歌に託する歌い方があるように思われる。そして、前者が大むね言葉の韻律美や映像性に重きを置くのに対して、後者は事象の描写を中心にしていると言えよう。前者が「言葉をして語らしめている」のに対し、後者が「言葉で語っている」のである。後者の立場に立つ憶良は、日本文学史上はじめて詩歌に明瞭に思想を感じさせるし、その後継者をなかなか求め得ない。憶良が正当か否かは別にして今日のように盛んにもてはやされはじめたのは、ごく最近の事であつた

が、その評価はまさに澎湃として高まり、今日の憶良研究はますます広く深いものとなりつつある。憶良について今日論じられている問題点を簡単にまとめると

一、出自・生没年代に關して

イ、出自が帰化人か否か

ロ、家系・家柄がどの程度であったか

ハ、生年及び没年をいつと定めるか、

二、官歴及び交友關係について

ニ、官職歴と年令の關係

ホ、旅人との交友關係の本質について

三、歌自体について

へ、卷五所収の作者未詳歌、卷十六所収の筑前国志賀白郎歌十首

の諸歌が果して憶良の作としてよいか否か。

ト、日本挽歌（七九四―七九九）の対象は「旅人の妻」か「憶良の妻」か。

チ、憶良の学問・思想・人生感と歌との關係について。

四、大伴家持が言う所の「山柿」は柿本人麻呂と山部赤人が憶良か。

等が挙げられる。勿論夫々の歌や文章についてのもっとこまかい研究もなされていて貴重な成果があがっているが、右の諸問題は憶良

研究上比較的大きなもので、議論の多いところである。ところで、

更に大きな問題で、まさに甲論乙駁しているのが憶良の評価の問題

ではなからうか。そしてその憶良をどう評価するかは、右にあげた

諸問題と無關係ではなく、むしろ殆んど全てと深いかわりがある

事は少し考えてみれば明かであらう。

今日、万葉の歌人の中で最も知名度の高いのは何と言っても柿本人麻呂であろうが、歌自体が知られていると言う点から考えると、「憶良らは今は罷らむ子泣くらむそを負ふ母も吾を待つらむそ三三七」や「銀も金も玉も何せむに勝れる宝子に及かめやも八〇三」を歌った憶良であるかもしれない。又万葉の歌人中、名前を聞く作品の傾向や歌人的資質が思い浮かぶと言う点で、憶良は屈指の歌人である。それは日本文学研究者間でそうであると言う以上に一般の歌の愛好家に言える点で、憶良の歌人としての存在意義が感じられる。ところが、この現象は全く今日的なものであって、明治以前の憶良に対する評価・関心は他の万葉歌人に比べて決して高いものではなく、勅撰集入集歌が殆んどない事、歌論書でも殆んど触れられていない事などを見ると、むしろ無視されて来たと言う方が当を得ていると思われる。その憶良の評価が今日ではまさに百八〇度の転換を見せて、かくも高くなってきたのは、時代とともに和歌観に大きな変化があったことや、歌の鑑賞や研究が専ら歌人達の手に行われていたものが、隣接諸学を含めて多くの研究者によって行われ始めた事によると言えよう。一体憶良の作品に接して最も考えさせられる所は、その作品が古代文学の広い底辺に支えられているのではなく、むしろ孤高の感を抱かせる事である。確かに題材の上では、防人歌その他に、人生の暗い部分を歌ったものが見出されるし、死を歌った挽歌の傑作は人の胸を打つが、それらはいくまでも静止した感動・乾いた感慨を読者に与えるだけである。ならば防人の悲しい別れや、父母を慕い妻子を思う情はどうかとの反論が当然考えられる。しかし防人の歌はその防人と言う特殊な制度と限界状

況が生み出したもので、その悲しみを推察することは出来るとしても、私達を共感の渦に巻き込むには、質量ともに弱いと言えよう。

それに対して、憶良が歌う、子供への限らない愛情・老・病・貧困への嘆きは時を越えて私達の胸に迫るものがある。単なる共感でなく、その時代への怒を呼びおこし、今日を省みさせ、更には明日の世界を描かせる力が溢れているのである。それは題材の重さや長歌の特性及び憶良の歌人としての力量が相俟ってはじめて可能なことであつたが、なかでも「老・病・貧困を敢えて歌つた」と言う点が高く評価されている。いや人生の苦痛のみならず、自分のごく身近におこる喜びや悲しみと言う日常生活を、目をそむけず、飾らずむしろ愚直と思える態度で歌っている所に憶良の真骨頂があるとされるのである。このような評価や理解から生み出される憶良像は、

感受性豊かな、生への激しい執着と愛国心を持ち、家族、特に子供への愛情に溢れる、社会正義を貫ぬこうとした老人、

と言うようなものである。以上のような憶良像は大体において正しいと思われるのであるが、私には何か物足りない、肝心なものを見落している理解に思えてならない。それは何かと言えば、右の憶良把握の背後にある、「素朴さへの讚美」に対する疑問に他ならない。つまり私は、憶良の意図的な側面をもっと大きく見て取らなければならぬのではないか、憶良の和歌創作上の或いは文学上の技巧、試みを注目しなければならぬのではないかと主張したいのである。憶良は、単に見聞した現実の諸相を心からの痛憤や叫びとして歌つたと考えるにはあまりに老成していたし、学究的であつたのではないだろうか。愛に溺れたり、激情にまかせて歌うタイプには見

えない。遅きに過ぎた登用以前の苦勞と、中下級官吏に負わされた

重荷、徳治主義を貫こうとする時起きる現実と理想の乖離の悲しさが数々の悲しい歌を詠ませたと考えるには、憶良は才能や教養に自信がありすぎ、物事が見えすぎたように思えてならない。先に挙げた大へん人口に膾炙している「銀も金も玉も何せむに……」の歌は古来、子を思う親心の真髓を歌つたものとして讃えられてきた。然し一方ではこの歌にある「理屈っぽさ」を或いは「通俗性」を非難する人も少くない。土屋文明氏に至つては「万葉集私注」の中で

長歌よりも更に概念的で、加ふるに三句切であるから、第四句の助辭の不足による不安定などがあり、出来の悪いものであるが、子を金銀珠寶に比較して勝れりとする通俗的觀念で、人にもてはやされる様になつた筋合も一応うなづける。現今ならば元よりして、ポスター用の作といふ所であらうか。しかし作者の目的は部民教諭にあつたのであるから、それは千年の後にまで力を失はず、十分達せられたと言ふべきであらうか。

と氏一流の裁断をアイロニーをまじえて述べられている。歌人としての激しい評価ではあるが、これに類する考えはかなり一般的であつて、憶良の或種の形式主義的な発想、大向うに受ける表現にきびしい目が向けられている。又憶良の中にある、学者、思想家としての才能の方を、歌人としてのそれよりも高くみようとする人達も少なくない。以下において、憶良における重要な一面が、創作に対する異常と思える程の意欲であり、彼の作の大部分が、かなり綿密に計算された構成、措辭から出きている事を指摘してみたい。そこにこそ憶良の作品が、個人的な悲しみや怒りから生み出されたものか、

詩的な創造から観念的に作られたものであるかを解く鍵がひそんで
いるように思われるからである。

憶良の創作にかける情熱を次の二つの面から見ていきたい。

一、代作歌やそれに類する作品が多い事。

二、構成上に大いに工夫が施されている事。

第一に、憶良には代作歌やそれに類する歌の多い事が屢々指摘され
るが、それについて少し考えてみたい。代作歌やそれに類するもの
としては、

歌みて熊凝の為に其の志を述ぶる歌に和ふる歌六首序を併せたり(八八四
〜八八六)

貧窮問答の歌一首短歌併せたり(八九二・八九三)

七夕の歌(一五一八―一五二六 一五二八・一五二九)

日本挽歌(前文及漢詩を含める。(七九四―七九九)の諸作を挙
げる事が出来ると思う。「日本挽歌」については従来「憶良が自分
の妻の死を悼んだもの」と考える説と「憶良が旅人の立場に立つて
詠んだもの」とする立場の二説があつて対立しているが、私には後
者を主張する人達の根拠が妥当に思われるし、代作歌を多く詠んで
いると言う憶良の歌人的な資質から考えても「旅人の妻の死を憶良
が代作した」と理解している。憶良のこの方面の才能について川村
幸次郎氏は「万葉集研究―憶良・家持を中心に―」で

他人の主観に参入することのうまい人である。前述の大作の熊凝
の場合然り。彼の絶唱である「貧窮問答」然り。数々の「七夕
歌」がそうである。但しそれは単なる表現技法としてではなく。

彼は他者の問題を単に外在なるものとして、客観及至傍観するに

恐びない性格の人なのである。それを自らの問題として意識し、
おのずからに参入してしまうのである。

と述べられる。この考えは多くの人の意見の集約的なものように
思われるが、もっと単純に表現技法を含めた彼の創作意欲、論議に
言う所の彼の文学志向性に代作の存在理由を求めざるべきではな
らうか。

「歌みて熊凝の為に其の志を述ぶる歌に和ふる歌六首」は、有間
皇子を悲しんで追和した一四五番歌と同様、他人の歌に感じて追和
したものである。更にその試みを進めて序の前半で熊凝の人となり
と死に場所を、後半で死に臨んでの熊凝の独白、続いて長短六首の
歌を歌わせている。麻田陽春も熊凝に代り、

国遠き道の長手を替しく今日や過ぎなむ言問ひもなく(八八四)

朝霧の消やすき我が身他国に過ぎかてぬかも親の目を欲り(八八五)
と短歌二首を、辞世の歌の形で詠んでいるが、全く心情的なもので
或いは熊凝について何か知る所があつたものかと思われるが、それ
は今教えてはくれない。憶良は陽春の作に刺激されての作としてい
るもの、序の後半からは全くの創作になっている。謂わゆる行路
死人は当時それ程珍らしいものではなかつたようで、日本書紀推古
二十一年十二月の条に載せる聖德太子の歌、柿本人麻呂が「讃岐の
狭谷島に、石の中に死れる人を祝て」詠んだとする歌(二二〇―二
二二)や河辺宮人が「姫島の松原に嬬子の屍を見て悲しび歎きて作
る歌」(二二八・二二九)等集中にも散見するし、「統日本紀」を
見ても、よく引用される和銅五年正月の条の

諸国役民 遷郷之日 食糧絶乏 多饑道路一 軋頓溝壑

其類不少

等その種の記事は少くない。実際に見聞する所や先人の詠んだ歌に影響を受けて、陽春の歌に唱和しようとした憶良の試みたのは、単なる短歌の唱和ではなく、序文・長短歌からなる総合的な作品であった。その形式的な事は後に考える事にして、この歌における「代作歌」の意味を考えるに、この創作はすでに普通の代作の範囲から出て、物語的な雰囲気や漂わせている。憶良の同情は熊凝の「年十八にしての死」にあり、その思いがけぬ死から思い出された彼の父母へと発想が展開していつている。この発想は先にあげた聖徳太子の歌に「：親無しに、汝生りけめや：」と父母への言及があり、人麻呂の二二三番歌に「……妻知らば来も問はましを、王梓の道だに知らず おぼほしく 待ちか恋ふらむ、愛しき妻らは」と妻への同情が歌われている。ただし、これまでの死者の霊を鎮める為の歌と違って、憶良の歌う熊凝の辞世の歌には想像力による場面の設定と告白をさせていて、いかにもさもありませんと万人に思わせる点で大きな違いがある。憶良が楽しんでいふと言うのは言いすぎであるにしてもこれを個人の、或いは民衆の立場に立つ悲しみのなせる業だとする考えを私はどうしても受入れる事が出来ない。一体、この歌を代作と呼ぶこと自体抵抗を覚えるのであつて、この線上にあると思う「貧窮問答歌」を考えたと、むしろ創作性の強い物語歌の趣きがある。長歌について言えば、母と別れて京へ上る悲しさから始まり、道中で友と語る熊凝・旅の途中で空して病を得て父母を思い出し狗の様に往来に寝て死を迎える嘆きが述べられていて、道具立てが出来すぎている感さえする様につくられている。続く六首の反歌

山上憶良私見 — その文学志向性について —

は長歌に比べると心に訴えるものをもっているし夫々の歌は全てが異った発想のもとに作られている。特に最後の歌

一世には二遍見えぬ父母を置きてや長く吾が別れなむ(八九一)は防人歌「時々の花は咲けども何すれそ母とふ花の咲き出来ずけむ」(四三三三)の歌に通ずる若者の悲しい死が歌われている。短歌の連作としては専ら抒情に徹して細やかな感性が感じられる成巧の部類に属するが、それだけに周到の作であると言えよう。

「貧窮問答歌」については最後に構成・虚構性の両面や代作的性質について考えるので後に残して、次に「七夕歌」についてみたい。七夕歌に意欲的に取り組んだ憶良の態度と現実直視の悲痛な歌とはそのままは繋がらず、やはり彼の創造性・文学的空想力の問題として解釈されねばならないであろう。七夕歌と銘うつものは集中百三十余首あるが、人麻呂歌集と作者不明の歌を除けば、憶良が巻八で長歌一首短歌十一首詠んでいて家持の十三首とほぼ並んでいる。十二首は左注に

右は養老八年七月七日に令に應ふる(一一五八)

右は神龜元年七月七日の夜左大臣の宅(一一五九)

右は天平二年七月八日の夜師の家の集會(一一五二六)

とあるように 皇太子(後の聖武天皇)や貴族の家において詠まれたものが多い。当然題材の空想性と相俟って机上の作であるし、詠む立場も(一一五八・一一五九)の歌のように織女身になっているもの、(一一五二・一一五二二)のように彦星になって歌っているもの、更に代作ではなく(一一五二七)のように地上の人間が夜空を見上げて詠んだものの三種に分ける事が出来る。ただ憶良の場合は彼

の詠んだ十三首中ただ一首だけが地上の人間が詠んだ形になっていて他は全て彦星と織女の気持になり代つての歌である。ここにおいて徳良は二つの彼の嗜好を現わしていると言えよう。その一は、七夕伝説と言う異国のロマンティックな題材に魅力を感じている彼の文芸志向の面であり、他の一は、二人の立場に立つての創作に興味を持つている点である。勿論結果的に徳良の七夕歌が他の七夕歌よりすぐれたものとなっている所はないようであるが、それは異国の伝説を踏まえて机上で作られた作品の当然の出来ばえであつたと言えよう。代作歌が多く、それに力を注ぐ事はその歌人の創作上の個性であり、文芸的意識の強い事であると考えてきたのであるが、次に第二の徳良の特徴である「構成に対する工夫」のあとをみてみる事にする。徳良は歌詞の調子が大変口誦的であることから無造作に歌を詠んでいるように考えられているが全く逆であつて、その全作品を通して言えることは詩歌に対する色々な試みと構成上の工夫のあとが明らかな事である。まず「日本挽歌」についてみるに、この歌は単なる長歌と短歌からなる和歌創作の範圍が出ていて、まず最初に「晝間 四生起滅 方夢皆空 三界漂流 噓環不息」に始まる四六文が置かれている。その典拠については代匠記以来次々に明かにされて来ているが、文選の詩句・史記・莊子・礼記・涅槃經・仏説譬喻經などによつて彩られていて徳良の学識の程が伺える。続いて「愛河波浪已先滅 苦海煩惱亦無結 從來厭離此穢土」本願託生彼淨刹」の七言絶句「日本挽歌一首」の題詞を掲げて二十九句の長歌及び反歌の短歌五首が連ねられている。つまり、漢文・漢詩・長歌・短歌が「妻の死」をテーマに有機的に結びついてい

て、集中これだけ整然とした構成の作品は他に見当らない。漢文の部分では彼の常の主張である「死の逃れ難き事、妻の死により再び逢えない夫の嘆き」が述べられ、絶句においては「死によつて夫婦の愛が絶え常に願つていたように穢れたこの世を去り浄土に生れ代りたい」と詠まれている。次の「日本挽歌一首」の題は他に例がないように、徳良が漢詩を文選他に言う所の挽歌詩とし、長歌を日本の挽歌であると断つたもので、和歌を以て中国文学に伍して行こうとする試みがなされているのである。長歌の内容は、全く仏教臭や漢籍の影響が感じられない点はやしとするにしても平板で短歌の出来には遠く及ばないようである。万葉集私注に

それにしても、全體の調子は外面的で、記述的部分が多く、心の底からゆり上げられた如き趣きのないのは、作の動機が動機であるから止むを得ないことではあるが、又徳良の性格なり態度なりの中途半端な為にもよるであらう。

と言われるのが當を得ていて、氏の言われる「動機が動機」と言うのはこの歌が旅人の位置においての作であると言う事であるが、その代作である点を勘案しても、「死の悲しさ」を長歌によつて表現する事の難しさが如実に示されていると言えよう。以上の作に比すれば五首の反歌はまだ情愛の込められている作品で、第一首目は「妻のいない部屋の淋しさ」第二首目は「遙か太宰府まで、死ぬ為に来たとしか思われぬ妻へのいとしさ」第三首目は、「死ぬと分つていたら筑紫の国中を見せておけばよかつたの」と言う後悔」第四首目は、「妻が生前見た棟の花が散りゆこうとしているのに自分の泣く涙はまだかわかないと言う悲しさ」第五首目は「大野山に立ちわ

たる霧は自分の嘆きの氣吹の風による」と言う歌の、五首連作である。特に第二首目と第四首目の次の二首は前者が情を後者が景を写して挽歌の反歌としては大変すぐれたものであると思われる。

愛しきよしかくのみからに慕ひ来し妹が心の術も術なき(七九六) 妹が見し棟の花は散りぬべし我が泣く涙はまだ干ひく(七九八) だが、日本挽歌(勿論漢詩文を含めて)全体を考えてみると、漢詩文にはいかにも憶らしい仏教の死生観が理路整然と述べられてはいるものの、とうてい自分の妻を失った夫の嘆きとは程遠い作文であるし、それが長短の和歌と融合する様子を見せてはいない。と言うよりも、四種の詩文の形式に対する興味が強く感じられ、読み終った時にはまるで対策の答案を見せられた気がするのを禁じ得なかった。対策の制度は確立していなかったろうが、四十数才の時に遣唐少録として採用される程にはそれなりの文章の鍛錬をし、朝廷にその実力を示す努力をした筈である。その名残りと言うわけではないだろうが、彼の漢詩文のみならず長歌までが模範答案を読む気がする。その最たるものが、やまひ痾に沈みて自ら哀む文^一で、全く歌を併っていない長い漢文のみであり、同じような漢詩文の競作、つまり漢文の序と七言の絶句からなる「俗道の仮合は即ち離れ去り易くして留り難きを悲み歎く詩一首序を併せたり」がある。歌に漢文の序のついた形式のものが、

或へる情を反さしむる歌一首序を併せたり(八〇〇—八〇一)
子等を思ふ歌序を併せたり(八〇二・八〇三)

世間の住り難きを哀しむる歌序を併せたり(八〇四・八〇五)

山上憶良私見 — その文学志向性について —

敬みて熊凝の為に其の志を述ぶる歌に和ふる六首序を併せたり(八六—八九一)

と憶良においては和歌と漢詩文との関係が色々に試みられている。次に憶良の文芸意識の表れである、代作歌としての性格と構成を含めた文学志向性が二つながら備えられている有名な「貧窮問答歌」について考えてみたい。憶良と言えば「貧窮問答歌」を抜きにしては語れないのであって、この歌を彼の作品の中から除くならば今日の憶良への評価は決定的に変るものと思われる。今日では以前のようこの歌をその内容の深酷さと特異性・官僚階級の一員として敢えて歌っている勇氣などを無条件に讚美しようとする論は少なくなつたが、それにしても、この歌に描かれている人々の生活が時代を越えて我々の魂をゆり動かす事実是否定出来ない。自負にすぎり糟湯酒をすすりながら、酔いに寒さと苦惱を忘れようとする貧者や、襦袢を纏い家族をかかえて生きる術を見出せない極貧の男、更に弱者には情容許もない租税徴収人などが生き生きと描かれているが、それは決して古代の庶民生活を知らせるだけに終つてはいない。新聞や小説或いは演劇の中で、もつと身近な所でも常日頃見聞きする人間の生きざまである。雨まじりの雪の降る夜、どうしようもない寒さのうち震えながら濁酒に身を温めては、繰り返して「俺は才能があるんだ、世間はなんて見る目がないんだ」とぐちる男、「私は真面目に働いているのに、広い世間に生きる場所もなく、不幸ばかりがなぜ続くのだ」と嘆く男もこの世の中には数多くいる事である。そのような題材の普遍性を見て、この歌が憶良の経験による写実的な歌であるとするならば大きな誤りを犯すことになるであらう。

う。何故ならば、その普遍的な内容と思わせる程に憶良は虚構の工夫をこらしているのである。憶良の理解と評価に大へんな努力を傾けられた高木市之助氏によればこの歌には孤語（萬葉集中唯一例しか求められない語彙）が二十七例もあると述べられ、更に「貧窮問答歌論」頁三五において

次にもう一つ、貧窮問答歌中の憶良の孤語の中に、能杼与比、という動詞がある。一体貧窮問答歌の中には例えば、

堅塩を取りつづし、ろひ、

綿もなき 布かたぎぬの みるのごと、わわけさがれる。

こしきには くものすかきて

のように、貧窮人の生活を叙するためには、憶良ならずとも使わずにはいられなかったであろうと思われる孤語が多い。

と言われる。まさにその通りで、憶良ならずとも使わずにはいられなかったであろうと思われるにもかかわらず、それ等の語が孤語であった所に、謂わゆる万葉の限界や貴族性があるのである。それにしても、上代語としては極めて異例で、語感としても決してよくなかったと思われる、語頭に濁音のくる「毗之毗之」と言う義声語をはじめとして、これ程孤語が見出されることは、やはりもっと注意されるべきであろう。内容から必然的に要求されたと同時に、それらの語を敢えて使った憶良の意志を読みとるべきであろう。新らしき内容を、俗語を含めて和歌の中に使うに於ては極めて新鮮な語句を以て歌おうとした憶良の作意を見るべきではなからうか。更に構成や修辭においても大変その効果が計算された歌である事が読み取れる。憶良を髣髴とさせて問いを発する貧しげな老人と、極貧の

中で父母妻子と身を寄せあいながら世を嘆く答者の問答体と言う詩形は憶良工夫の第一である。問答形式の由来については、古事記の八千矛の神と沼河比賣との唱和や、相聞歌中の問答歌（巻十一）の例、中国文学、就中玉台新詠所収の作品或いは文選の諸作品が云々されてきた。又憶良が渡唐中見聞したのである中国の諸作家・作品・社会的環境の影響も充分考慮されてよいであろう。しかし、いかに先行作品があるにしても、一首の長歌を問答の形式で歌いあげようとする態度には、新しい試みに意欲をもつ憶良の姿勢が伺える。

この形式をとらず、単に一人の述懐にしてしまえば、この作品のもつ立体感と、口誦性、あるいは臨場感を大いに削ぐ結果となるであろう。問う者と答える者が同じ「貧しさ」の線上にはありつつも後者には全く余裕のない極貧者の姿を見る事が出来る。それ故に従来、この作品の主眼が後半にあると説かれて来たのであるが、本当の所この問答の形式が採られたのは、漸層法の効果をねらったものであろう。問う者のような、学者的清貧は当時であつては今日私達が思う程の貧乏ではなく、むしろ人間らしい生活であつたらうし、その意味からも問う者を貧者とし、答える者を窮者とする説は領けないのであるが、前者によって後者の貧窮の様子が一そう鮮明になっていることは確かである。問答の形式が、二人の主人公の登場を可能にし実在感をあらしめた。次に内容についてみても、この「貧窮問答歌」が、実在する個々の人間の単なる描写から成り立っているものでない事は確かで、「貧窮」の典型が歌われている所に憶良創作の秘密を見るのである。この点については既に多くの人々が何等かの形で指摘しているのであるが、今日も問答する二人の生き生

きとして感じられるのはまったく憶良の詩的把握の適確さにあると
言う外はない。

……堅塩を取りつづしろひ 糟湯酒 うち啜ろろひて 咳ぶかひ
鼻びしびしに しかととあらぬ 鬚かき撫でて、我を除きて 人
は在らじと 誇るへど 寒くしあれば……

ここには大伴旅人のように隠者志向を高らかに宣言できず、俗世間
に縋りついて、誇りだけでは寒さすら防げない「貧乏才子」が泣き
笑いの中に描かれている。その歌い方はむしろ自虐的であり、又あ
まりにも今日的である。後半に歌われる貧窮者にはもはや何の救い
もない。地面に藁を敷いただけの冷い床の上には、どうも病気で横
わっていると思われる男、

……父母は 枕の方に、妻子どもは 足の方に囲み居て 憂ひ吟
ひ 籠には 火気ふき立てず 甌には 蜘蛛の巣かきて……

父母や妻がその男のまわりを寒さと飢えに弱りながらとりかこみ、
かすかなうめき声を立てている。続いて「楚」以て責めゆる里長
が声だけで登場する。その様子はまるで「短き物を、端截ると云へ
るが如く」であると言う。農民の疲弊がいかなるものであったかは
和銅前後の「続日本紀」の記事で知る事が出来るが、和銅四年十二
月の所に

親王曰下及豪強之家 多占山野 防百姓業

とあって貴族豪族は逆に増々勢力を拡大していった。憶良は、強大
な国家の最先端たる里長を声だけで表現しているが、それは国家へ
の批判とかその一端として連ることへの自己批判とか考えるべきで
はなく、あくまでも貧窮を際立たせる為の手法ではなかったろう

山上憶良私見 — その文学志向性について —

か。「貧窮問答歌」に歌われている内容の一つ一つが即ち「衣・食
・住・社会環境」の全てが「貧窮」を彫塑的に描写する為に選びぬ
かれていと言えようである。私は憶良がこの歌を歌った時の心
理は、「社会的憤怒」に燃えていたのでもなく、反権力的思想に駆ら
れたのでもなく、先人の歌っていない分野、貧窮者の世界を歌おう
とする創作的意欲に溢れていたと思うのである。以上のように「貧
窮問答歌」は形式、内容の両面からみて憶良の詩的試作の大成功作
であった。

憶良の創作意欲は次の「秋の野の花を詠める二首」

五三七) 私の野に咲きたる花を指折りてかき数ふれば七種の花その一 (一

五三八) 芽子の花尾花葛花瞿麦の花・女郎花また藤袴朝顔の花その二 (一

においても存分に發揮されている。両首はその一・その二とあるよ
うに二首で一つの意味をなすようになって、後者は秋の七種の
花が施頭歌の中に巧みに歌い込まれている。短歌と旋頭歌の組み合
せは、先に述べた漢文の序と歌の組合せと同様新しい試みで集中こ
の一例だけである。巻八秋の雑歌の中の歌ではあるし、憶良の歌の
中で唯一、植物を歌ったものではあるが、それは単に題材が花を取
り扱った、と言うだけで、歌自体は長忌寸意吉麻呂の数種の物を詠
み込んだ歌と同じ機智の歌にすぎない。又旋頭歌と云う歌体は、奈
良朝には殆んど詠まれていないもので、集中六十二首の旋頭歌中、
人麻呂歌集の中の三十五首及び古歌集から出たものを除くと、高橋
虫麻呂(一七四四)大伴坂上郎女(五二九)大伴家持(四〇二六)

位のものである。つまりこの「七種の花」の歌が内容形式ともに意欲的な作である事は明かで、憶良が和歌に様々な可能性を求めた事の一つのあかしであると言えよう。

私は今、憶良の文芸意識が彼の詠歌のすみずみまで働いている事を言いたいあまりに、憶良の、あるがままの姿と思われてきた。子等を思うあまりに人間的な、生に執着する良心的な官吏、と云うイメージを私流に歪曲しているのではないかと不安を抱いている。と言うのはこれ又有名な「宴を罷る歌」

憶良らは今は罷らむ子泣くらむそを負ふ母も吾を待つらむそや、梅花三十二首中の憶良の歌

春さらばまづ咲く宿の梅の花、ひとり見つつや春日暮さむ（八一）

にまである種の銜いを感じるからである。然し前の歌を歌って静かに退出する老官吏の姿を思い浮かべる事は出来なくて、人々が宴に欲を盡している最中、歌才のある憶良はこの歌を座興の一種として歌い（豫じめ作っておいたのであろうが）万座の笑いを誘って面目を得た憶良の得意な顔が浮かぶのである。又後の歌にしても、他の人々が素直に梅の花を賞で、帥大伴旅人に感謝の念を歌っているにかかわらず、彼一人孤独を歌うのも一種のポーズのように思えるのである。やや悪意のある見方ではあるが憶良の歌につきまとう術学的な、人と異なることを強調しようとする姿勢をどうしても感じないわけにはいかないのである。

以上憶良の歌を数首選び出して、憶良の文学志向的な性質をみてきたのであるが、これは決して憶良の存在意義を減少させようとす

る意図からではなく、従来の憶良観がやや偏っていたのではないかと考えたことえの私なりの回答であった。又憶良の作はよく練られ、文学的意図を持ったものであり、それだからこそ憶良の作品が今日もなお意味を持ち続けていると言いたかったのである。